

日本初の『共産党宣言』全訳本からみた術語の生成

劉 孟洋

1906年刊行の堺利彦・幸徳秋水訳本（以下「堺・幸徳訳本」と略称）は『共産党宣言』の日本最初の本全訳本であり、マルクス主義術語の創出を考察するには里程標的な資料である。当訳本に用いられた術語は、早期の社会主義関連資料から伝承されたものが多く、それ以後の日本語諸訳本に影響を及ぼすものもある。また、中国初の『共産党宣言』全訳本も堺・幸徳訳本（1906）を底本に翻訳されており、近代中日マルクス主義術語の交流史という視点からみても、当訳本は重要な研究資料である。本研究では主に日本の早期の社会主義関連資料を視野に置きながら、堺・幸徳訳本（1906）におけるマルクス主義術語を一々調査し、創出と伝承という視点から近代日本語におけるマルクス主義術語の生成プロセスを探ろうとする。

一、研究資料の成立

本節では、日本での社会主義・マルクス主義学説の伝播史を振り返り、日本初の『共産党宣言』全訳本が刊行されるまでの主な資料を整理する。本研究で取り扱う研究資料は社会主義・マルクス主義学説の日本伝播史からみて、二つの部分に分けられる。

1.1 明治初中期の社会主義・マルクス主義関連資料の成立

日本で最初に社会主義学説が触れたのは19世紀70年代の明治初期頃であり、加藤弘之、西周らをはじめとする明六社の啓蒙学者を主体に社会主義、共産主義に関する啓蒙的な知識が触れられた。加藤弘之は『真政大意』（1870）において、初めて社会主義と共産主義の概念に触れ、それぞれ「ソシヤリスト」、「コムミュニス」と音訳した¹。西周は自ら活字した講義案の『百学連環』（1872）の中で、社会主義と共産主義の概念をそれぞれ「会社之説（Socialism）」、「通有之説（Communism）」と訳し²、さらには1878年6月から1879年末にかけて活字化した「社会党の論説」で社会主義を「社会党」と称し、欧米の空想社会主義学派についての紹介を行った。19世紀70年代の日本における社会主義学説の紹介は全般的に批判的な姿勢であり、内容も断片的であった。

日本が真正面から社会主義学説を考え始めたのは19世紀の80年代からであり、小崎弘道「近

¹ 加藤弘之講述『真政大意』（1870），『明治文化全集』第5巻・上，日本評論社（1994），p102。

² 西周講述『百学連環』第2篇・下（1872），大久保利謙編『西周全集』第4巻，宗高書房（1966）p247。

世社会党ノ起因」(1881)、宍戸義知訳『古今社会党沿革説』(1882)、久松定弘『理想境事情』(1882)、城多虎雅「論欧州社会党」(1882)等の出版物が相次いで刊行され、社会主義の思想が正面に捉えられた。これらのうち、小崎弘道(1881)ではドイツの社会主義指導者マルクス、エンゲルスの名が提起されており、日本の刊行物でマルクスの名が触れられたのは初めてである。宍戸義知訳(1882)は日本初の社会主義関連の単行本であると言われており³、社会主義の各流派について紹介されているほか、マルクス主義を中心とした紹介が行われており、1848年以前におけるマルクスの生い立ち及び『共産党宣言』の主な内容が紹介されていた。

19世紀90年代から20世紀初頭にかけて、日本の労働者階級は目覚め始め、自分の權益を求め始めた。同時期は社会主義・マルクス主義学説が日本に伝わった全盛期でもあり、深井英五、田島錦治、福井準造、村井知至、幸徳秋水、神戸正雄等多くの社会主義研究者が生まれ、マルクス主義学説を対象とした研究著書が活字された。マルクスの『共産党宣言』を対象に論じられた著書として、深井英五『現時之社会主義』(1893)、田島錦治『日本現時之社会問題』(1897)、福井準造『近世社会主義』(1899)、幸徳秋水『社会主義神髓』(1903)等が挙げられる。深井英五(1893)では、その第4章第2節「新社会主義の經典マルクスの資本論」において、マルクスの革命活動及び『共産党宣言』の主な内容について紹介された。田島錦治(1897)では、『共産党宣言』は「共産党の檄文」と翻訳され⁴、マルクスの生い立ちから『共産党宣言』、『資本論』等の著作物が活字されるまでの背景、及び『資本論』を対象とした経済学理論の紹介が体系的に行われている。福井準造(1899)では、当書の第2編第1章「カールマルクス及び其主義」においてマルクスの生い立ちを詳しく紹介され、更には『資本論』、『共産党宣言』等の主な内容、及び執筆過程が紹介された。幸徳秋水(1903)はマルクスの『共産党宣言』等の著作物に基づき、唯物史観の角度から産業革命以来の資本制度における弊害を分析した上で、科学的社会主義の基本原則について論じられている。

これまでの社会主義に対する断片的、曲解的な紹介とは異なり、社会主義研究者たちにより社会主義思想・マルクス主義学説が系統的に紹介され、日本における社会主義思想・マルクス主義学説の伝播は新たな段階を迎えた。術語の面からみて、70年代頃の西周、加藤弘之らをはじめとする啓蒙学者の資料では、二字漢語からなる術語が主力であったが、80-90年代頃に出版された小崎弘道、宍戸義知、深井英五、田島錦治、福井準造ら社会主義研究者の著書・訳著では三字以上の漢語からなる術語が大幅に増えた。これらの先行資料は、日本語におけるマルクス主義術語の早期的使用実態を考察するのに重要な資料である。

1.2 日本初の『共産党宣言』全訳本の成立

³ 渡部義通・塩田莊兵衛『日本社会主義文献解説-明治維新から太平洋戦争まで-』(1958)、大月書店、p35。

⁴ 田島錦治『日本現時之社会問題』(1897)、東華堂、p230。

19世紀から20世紀へ移って間もない1904年に、『共産党宣言』の日本語初訳本が刊行された。訳者の堺利彦と幸徳秋水は共に日本早期の社会主義運動活動家であり、二人は1903年に平民社を創立し、週刊『平民新聞』を発行し、「平民主義」、「社会主義」、「平和主義」を唱えた。『平民新聞』創刊一周年を記念して、『共産党宣言』の日本語初訳本は1904年11月13日発行の『平民新聞』第53号に掲載されていた。同訳本はサミュエル・ムーア (Samuel Moore) 訳の1888年英訳本を底本にして翻訳されたものであり、巻頭にエンゲルスにより活字された序文が付けられている。1904年の初訳本は第三章の内容が欠けているので、まだ全訳本とは言えないが、『共産党宣言』を初めて日本語で日本に伝えたものである。1904年の初訳本が刊行されて間もなく、日本政府は社会主義運動の発展を恐れ、いわゆる新聞紙条例により秩序壊乱に当たるとして発売を禁止し、訳者及び発行人西川光次郎は起訴され、同時期の日本社会で広く読まれることはなかった。

二年後の1906年、堺利彦は1904年初訳本に欠けていた第3章部分の訳文を新たに加えて、『共産党宣言』の日本語全訳本を完成させた。この日本語全訳本は1906年3月創刊の『社会主義研究』第1号に掲載されていた。第3章の翻訳は堺利彦独自で担当したものであるが、全訳本の訳者名は相変わらず「堺利彦・幸徳秋水共訳」と記されている。また、この全訳本の他の章については、若干の変更が加えられてはいるものの、1904年の『平民新聞』に発表された初訳本とほとんど同じである。

術語の使用に関しては、小崎弘道 (1881)、深井英五 (1893)、福井準造 (1899) 等の先行資料から大きな影響を受けている。しかし、これまで堺・幸徳訳本 (1906) をめぐる術語の研究は、宮島達夫 (1979)、玉岡敦 (2008、2012) をはじめとする術語の変遷、及びに石川禎浩 (1992)⁵、陳力衛 (2008)、大村泉 (2009) をはじめとする中日術語の対照を中心に行われてきており、先行資料を視野に入れた術語の早期的生成、伝承の研究はほとんど行われていなかった。従って、本研究では主に1906年版の全訳本を研究資料として取り扱い、1.1節で整理した早期の先行資料を視野に置きながら、堺・幸徳訳本 (1906) に使われているマルクス主義術語を中心に考察を加える。

二、先行資料にある術語

本研究では宮川実編『マルクス経済学辞典』(1956)、宮川実編『マルクス経済学辞典』(1965)、久留間鮫造編『資本論辞典』(1966)等のマルクス主義関連の日本語辞書を参考に、堺・幸徳訳本 (1906) から合計152語もの術語を抽出した。なお、堺・幸徳訳本 (1906) 以前の先行資料との伝承関係を視野に入れた上で、これらの術語を形態別に整理したところ、表1の通りとなる。

⁵ 本研究では石川禎浩著、陶柏康訳〈關於陳望道翻譯的《共産党宣言》〉,《上海党史研究》第2期(1995)を参照。

表 1 堺・幸徳訳本 (1906) におけるマルクス主義術語の一覧表

	二 字 漢語	三 字 漢語	四 字 漢語	五 字 漢語	六 字 漢語	七 字 漢語	句形式 の短語	合計
先行資料にある術語	63	8	21	3	0	0	9	104
堺・幸徳訳本 (1906) に新しく現れた術語	0	5	19	5	3	2	14	48
合計	63	13	40	8	3	2	23	152

表 1 から分かる通り、これらの 152 語は出身別に「先行資料にある術語」と「堺・幸徳訳本 (1906) に新しく現れた術語」の 2 類に分けられる。これらのうち、「先行資料にある術語」とは堺・幸徳訳本 (1906) が刊行される以前に創出され、社会主義・マルクス主義関連の概念を表す術語として深井英五 (1893)、福井準造 (1899)、幸徳秋水 (1903) 等の先行資料で用いられたものである。この種の術語は形態別に二字漢語、三字漢語、四字漢語、五字漢語、句形式の短語に分けられる。本節では「先行資料にある術語」を対象に、形態別に分けた上で、術語の創出から堺・幸徳訳本 (1906) に伝承されるまでの経緯について考察を加える。なお、三-五字漢語からなる術語は多字漢語からなる術語として取り扱い、「二字漢語からなる術語」、「多字漢語からなる術語」、「句形式の短語からなる術語」の 3 節に分けて考察を行う。

2.1 二字漢語からなる術語

先行資料にある 104 語のうち、二字漢語からなるものは 63 語あり、全体の 61% を占めている。これらの 63 語を出身別で整理すると、以下の通りである。

漢籍に出典のある新義語：

財産、衝突、道徳、闘争、独占、法律、革命、工業、関係、貴族、国家、
貨幣、機械、交換、階級、解放、経済、競争、労働、利害、利益、領主、
掠奪、矛盾、民主、農夫、農民、農業、奴隷、批評、平等、平民、人口、
商業、社会、紳士、生産、世界、市場、市民、思想、文明、物質、消費、
衣食、運動、争闘、政党、政治、専制、資本、自由、宗教

中国製新造語：

恐慌

日本製新造語：

地代、分業、賃銀、目的、農奴、商品、原料、哲学、真理

社会主義・マルクス主義関連の文献で頻繁に使われている二字漢語に関しては、朱京偉 (2007) の研究によれば、術語というよりは基本概念を表す一般語として機能しているものである⁶。上

⁶ 朱京偉〈馬克思主義文献の早期日訳及其訳詞〉《語義的文化変遷》武汉大学出版社 (2007) p.411。

記の二字漢語は出身別に「漢籍に出典のある新義語」、「中国製新造語」、「日本製新造語」の3類に分けられ、全般的に「漢籍に出典のある新義語」が最多数を占めている。

「漢籍に出典のある新義語」とは、社会主義・マルクス主義的ニュアンスが賦与されたことにより、元来の意味とは違った新しい意味に生まれ変わったものであり、森岡健二（1991）で指摘されている訳語創出法のうちの「再生転用」に値している。「中国製新造語」とは19世紀の在華宣教師より編纂された英華辞書において初期用例がみられたものである。例えば、「恐慌」はロブシャイド編《英華字典》（1866-69）において“*Afraid*”の訳語としてすでに収録されていた。「日本製新造語」とは、いずれも明治以降、日本で創出された新漢語である。

これらの63語は語ごとに出身が異なっているが、いずれも堺、幸徳二人による『共産党宣言』の全訳に先立って、社会主義・マルクス主義学説の基本概念を表す訳語として充てられたものであった。

「漢籍に出典のある新義語」である「生産」の1語を例にみたところ、まず、堺・幸徳訳本（1906）において、「生産」は以下の様に用いられていた。

物質上に於ける生産分配の共産的方法に対する総ての駁論は、又同一筆法を以て、精神上に於ける生産分配の共産的方法を攻撃し来れり⁷。

堺利彦・幸徳秋水訳「共産党宣言」（1906）

堺・幸徳訳本（1906）で用いられている「生産」は、「一定の生産関係で結ばれた人々が、自分たちの需要に満足するために、生産道具を利用して自然を改造し、物質資料をつくる過程」を指しており、“*Produce/Production*”の訳語として充当されたものである。

この語は新造語ではなく、漢籍に出典がみられ、多義語としてそれぞれ「働いて生計を立てる」、「出産する」等の意味を表していた。

其媿嫉平之不視察家生産 漢・司馬遷《史記－陳丞相世家》
 為世所貴后漢錫光者蓋其苗裔也子孫生産桂陽山谷往往出而效用于世・・・
 明《廣諧史》卷二

日本語に「生産」が用いられたのは、本研究の調査によれば、江戸時代の末頃であると推断されている。幕末刊行の『江戸繁昌記』には、次の用例が見られた。

都俗の諺に曰、「三女を生産すれば、一生安活す」と...

寺門静軒『江戸繁昌記』（1832-36）三・外宅

『江戸繁昌記』の「生産」から、「出産する」の意味を表し、中国の古典から受け継がれた用法だと考えられる。

経済学用語として用いられたのは明治初期の日本の啓蒙著作からである。たとえば津田真道著「貿易権衡論」に、

⁷ 堺利彦・幸徳秋水訳「共産党宣言」、『社会主義研究』第1号（1906）、p21。

蓋此消費は猶一家に在て小兒數學の費用の如し以て他日生産の資本に供する所以なり縱令目前の損失少なからずと曰ふと雖後來の裨益を計較せば豈洵に止むを得ざるの消費ならずや⁸

津田真道「貿易権衡論」(1875)

とあり、「生産」に新たな意味が賦与され、「消費のための欲望を満足させ、生活に直接、間接に必要な物資や用役を作り出すこと」という意味で使われていた。

19 世紀 90 年代に入ると、社会主義思想・マルクス主義学説を対象とした研究が日本で盛んに行われ、「生産」は田島錦治、深井英五、福井準造等の社会主義研究者の著書で“Produce/Production”の訳語として充当され、マルクス主義政治経済学の術語として多く使われるようになった。

而して労働の価格は労働を生産するの費用、換言すれば労働者が時の標準に従つ生活するだけの費用に依て定まるとは、リカルドが賃銀の法則也⁹。

深井英五『現時之社会主義』(1893)

是故に共産主義者は、私有財産を全廃して共有財産制度を以て之に代へ、自由競争を杜絶して共に生産に協力し、其結果(即ち生産物)を平等に分配し、又は共に享有して、絶対的に経済上の平等を達せんと欲したり¹⁰。

田島錦治『日本現時之社会問題』(1897)

この様に、深井英五(1893)、田島錦治(1897)等の社会主義関連の資料で術語として用いられた「生産」は、後に堺・幸徳訳本(1906)にも伝承され、“Produce/Production”の訳語として充当された。

2.2 多字漢語からなる術語

先行資料にある 104 語の術語のうち、三-五字の多字漢語からなるものは 32 語あり、全体の 31%である。これらの術語は形態別に以下のものが挙げられる。

三字漢語：

共産党、労働者、生産力、委員会、無政府、自由民、生産物、殖民地

四字漢語：

封建社会、封建制度、共産主義、労働階級、労働時間、平均価格、
社会主義、自由競争、自由貿易、自由主義、階級闘争、共産社会、
階級争闘、経済関係、賃銀労働、生産方法、生産過多、生産機関、

⁸ 津田真道「貿易権衡論」(1875)は『明六雑誌』第 26 号に掲載されており、当用例に関しては日本国立国語研究所『近代日本語歴史コーパス(明治・大正時代編)』を参照。

(http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/meiji_taisho.htm)

⁹ 深井英五『現時之社会主義』(1893), 民友社, p72。

¹⁰ 田島錦治『日本現時之社会問題』(1897), 東華堂, p4。

生産機械、私有財産、同業組合

五字漢語：

共産党宣言、賃銀労働者、同業組合員

これらのうち、三字漢語に関しては「語基」と「接辞」の結合によって構成されており、「派生語」と言われて、「生産力」、「労働者」等の「2+1」形式からなるものと、「殖民地」等の「1+2」形式からなるものに分けられる。これらの三字漢語の構成要素となる二字漢語の語基には、「生産」、「労働」、「自由」等と社会主義・マルクス主義学説の基本概念を表す二字漢語が挙げられる。したがって、三字漢語からなる術語の多くは、社会主義・マルクス主義学説の基本概念を表す二字漢語の術語の「派生語」に相当するものとみられる。

四字漢語に関しては、いずれも「2+2」形式の二字漢語の語基同士での結合によって構成されている。具体的な構成要素をみて、「社会」、「運動」、「生産」、「労働」、「階級」、「闘争」、「自由」等と社会主義・マルクス主義学説の基本概念を表す術語が挙げられる。

五字漢語に関しては、「同業組合員」のように「4+1」の「語基+接辞」形式で構成されたものと、「賃銀労働者」等のように二字漢語と三字漢語の語基同士の結合によって構成されたものがある。これらの五字漢語の構成要素（語基）となる二-四字漢語には、先述の「賃銀」、「社会」、「労働者」、「共産党」、「同業組合」等のマルクス主義術語が挙げられる。

この様に、社会主義・マルクス主義学説の基本概念を表す二-四字漢語を語基とした術語の創出は堺・幸徳訳本（1906）が刊行される以前から既に行われており、それらの多くが堺・幸徳訳本（1906）に受け継がれている。

具体例として、「生産機関」の1語が取り上げられ、まず、堺・幸徳訳本（1906）において、「生産機関」は以下の様に用いられていた。

一切の資本を紳士閥より奪取し、一切の生産機関を国家の手、即ち当時の権力階級を成せる平民の手に集中し、而して能ふ限り速に生産力の全体を増加すべし¹¹。

堺利彦・幸徳秋水訳「共産党宣言」（1906）

堺・幸徳訳本（1906）で用いられている「生産機関」は、マルクス経済学において労働と結合して生産物を生み出すために使われる物的要素を指しており、“Means of production”の訳語として充当されたものである。

この「生産機関」という術語の語源に関しては、本研究の調査によれば、19世紀90年代頃に刊行された社会主義関連の日本語資料からきており、田島錦治の『日本現時之社会問題』（1897）において初期用例がみられた。

Saint・Simon（サンシモン）派の真正の希望は土地資本の如き総般の生産機関を共有の下

¹¹ 堺利彦・幸徳秋水訳「共産党宣言」、『社会主義研究』第1号（1906）、p34。

に置き、各人は自己の能力に応じて適宜に此の生産機関を使用し、其の成就したる仕事の多寡大小に比例して報酬を與へんとするに在るのみ¹²。

田島錦治『日本現時之社会問題』(1897)

田島錦治(1897)で用いられている「生産機関」とは「生産の道具」を指しており、生産力を構成する基本的な要素の一つを示していた。田島錦治(1897)に続き、村井知至の『社会主義』(1899)にも「生産機関」という術語が用いられていた。

社会主義は工業社会に於て新に計画せらるる社会制度にして、偉大なる物質的生産機関に於ける私有財産を廃し、之に代へて合同資本を作り、更に各人協同して生産を取り行ふべきを唱へ…¹³。

村井知至『社会主義』(1899)

この様に、田島錦治(1897)、村井知至(1899)等の著書において術語として用いられた「生産機関」は、後に堺・幸徳訳本(1906)にも受け継がれ、“Means of productive”の訳語として充てられた。

2.3 句形式の短語からなる術語

先行資料にある 104 語のうち、句形式の短語からなるものは 9 語あり、全体の僅か 8%であり、以下のものが挙げられる。

社会的労働、共産的革命、交換の機関、交換の価格、農業的革命、
商業上の恐慌、社会的関係、社会的生産、政治的闘争

これらの 9 語は、主に「O+的+O」或いは「O+の+O」形式によって構成されており、構成要素となる漢語部分には「革命」、「農業」、「社会」、「労働」、「生産」、「自由」等と、マルクス主義学説の基本概念を表す二字漢語の術語が挙げられる。堺・幸徳訳本(1906)以前の先行資料において、これらの 9 語が表す概念が語の形で翻訳された痕跡はみられず、いずれも「O+的+O」、「O+の+O」、「O+上の+O」等と句形式の短語の形で訳されていた。

具体例として、「社会的関係」の 1 語を取り上げる。まず、堺・幸徳訳本(1906)において、「社会的関係」は“Relation of society”の訳語として以下の様に用いられていた。

人の理想、意見、観念、約言すれば即ち人の自覚なる者は、其の物質的生活状態、其の社会的関係、其の社会的生活の変化するに従つて、亦変化し行くものなるは、豈に智者を待て後之を知らんや¹⁴。

堺利彦・幸徳秋水訳「共産党宣言」(1906)

¹² 田島錦治『日本現時之社会問題』(1897)、東華堂、p104。

¹³ 村井知至『社会主義』(1899)、労働新聞社、p23。

¹⁴ 堺利彦・幸徳秋水訳「共産党宣言」、『社会主義研究』第1号(1906)、p23。

日本語において、“Relation of society”の訳語が誕生したのは19世紀90年代であり、深井英五、福井準造らの著書において、「社会的関係」、「社会的の關係」等と句形式の短語の形で訳出されていた。

然るにマルクスは無制限的に此法則を適用し、一步を進めて総ての価格労働の創造物たるを正せんとせり。されど彼れは価格が社会的の關係によりて支配さるるを見たり¹⁵。

深井英五『現時之社会問題』(1893)

資本既に悖理の貯蓄なりとすれば生産社会に於ける資本家の権利も亦当然消滅すべきにあらずや。是に於て彼は資本に関する一新説を立て、之を以て社会的關係より生ずる一種の名称なりとなし¹⁶。

福井準造『近世社会主義』(1899)

20世紀の初頭に刊行された幸徳秋水の『社会主義神髓』(1903)でも“Relation of society”の訳語が用いられており、福井準造(1899)のと同じく、「社会的關係」という形で表記されていた。

彼等は謂らく今の国家は「財産及び階級の支配なる現在の社会的關係を維持せんが為めの権力に過ぎずと、故に彼等は斯る国家を根本的に絶滅し、彼の一階級の利益を承認せずして、一切平等の利益を増進するの組織を建設せずとを望むもの也¹⁷。

幸徳秋水『社会主義神髓』(1903)

この様に、堺・幸徳訳本(1906)以前の先行資料では、いずれも句形式の短語の形で“Relation of society”という概念を訳していた。堺・幸徳訳本(1906)で用いられている「社会的關係」は、先行資料から直接由来した同形の術語というよりは、訳者が先行資料から句形式の短語の形による訳出方法を学んだ上で案出した訳語という方が妥当であるとみられる。

三、堺・幸徳訳本(1906)に新しく現れた術語

堺・幸徳訳本(1906)に新しく現れた術語とは、深井英五(1893)、福井準造(1899)、幸徳秋水(1903)等の先行資料での用例がみられず、堺、幸徳の二人が『共産党宣言』を翻訳した際に新たに案出した可能性が高いとみられるものである。この種の術語は合計48語あり、形態別に三字漢語、四字漢語、五字漢語、六字漢語、七字漢語、句形式の短語に分けられる。本節では三-七字漢語からなる術語を多字漢語からなる術語として取り扱い、「多字漢語からなる術語」、「句形式の短語からなる術語」の2節に分け、堺、幸徳の二人が如何なる形で術語を案出してきたのか考察を加える。

¹⁵ 深井英五『現時之社会主義』(1893), 民友社, p104。

¹⁶ 福井準造『近世社会主義』(1899), 有斐閣, p168。

¹⁷ 幸徳秋水『社会主義神髓』(1903), 朝報社, p117。

3.1 多字漢語からなる術語

堺・幸徳訳本（1906）に新しく現れた 48 語のうち、多字漢語からなるものは 34 語あり、全体の 70%を占めており、以下のものが挙げられる。

三字漢語：

農奴制、理想家、平民党、紳士閥、小紳士

四字漢語：

財産関係、階級対立、禁欲主義、第三級団、工場制度、工場組織、
経済事情、圧制階級、労働器械、労働組合、平民革命、平民階級、
平民運動、権力階級、紳士階級、紳士社会、小紳士閥、治者階級、
中間階級

五字漢語：

被圧制階級、社会生産力、紳士閥国家、小紳士階級、真社会主義

六字漢語：

封建社会主義、空想社会主義、紳士社会主義

七字漢語：

基督教社会主義、小紳士社会主義

これらのうち、三字漢語はいずれも「接辞」と「語基」の結合によって構成されており、「2+1」の「接辞+語基」の形式が多数を占める一方で、「小紳士」のような「1+2」の「接辞+語基」形式で構成されたものもある。2.2 節で述べた通り、三字漢語からなるマルクス主義術語の多くは、社会主義・マルクス主義学説の基本概念を表す二字漢語の術語を語基として創出されている。具体的な構成要素をみて、これらの三字漢語のほとんどが「農奴」、「平民」、「紳士」等の先行資料にある二字漢語の術語を語基として造られたものである。

四字漢語に関しては、全般的にみて「2+2」という二字漢語同士での結合によって構成されたものが多数を占めているが、「小紳士閥」のような「語基」+「接辞」の結合によって構成されたものもある。具体的な構成要素をみて、大多数の術語は先行資料にある「農奴」、「平民」等の二字漢語の術語を語基として造られたものである。一方で、「紳士階級」、「小紳士閥」等のように、堺・幸徳訳本（1906）に新しく現れた「紳士閥」等の術語を語基として造られたものもある。

五字以上の漢語に関しては、五字漢語の 5 語、六字漢語の 3 語、七字漢語の 2 語がある。2.2 節で取り上げた先行資料にある多字漢語の術語では、五字が字数上の最大限であったのに対し、堺・幸徳訳本（1906）に新しく現れた多字漢語の術語では、五字以上からなるものも数多くみられた。五字漢語からなる 5 語は、「真社会主義」の 1 語が「1+4」形式の「接辞+語基」からなっており、その他の 5 語はいずれも二字漢語と三字漢語からなる語基同士の結合によって構

成されている。六字漢語からなる 3 語は、いずれも二字漢語と四字漢語からなる語基同士の結合によって構成されており、七字漢語からなる 2 語は、三字漢語と四字漢語からなる語基同士の結合によって構成されている。具体的な構成要素からみて、これらの術語は、「社会生産力」、「空想社会主義」、「基督教社会主義」等の様に、先行資料にある「生産力」、「社会主義」等の術語を語基として造られたものもあれば、「被压制階級」、「紳士閥国家」、「小紳士階級」等の様に、堺・幸徳訳本 (1906) に新しく現れた「小紳士」、「紳士閥」、「压制階級」等の術語を語基として造られたものもある。

この様に、堺・幸徳訳本 (1906) では、社会主義・マルクス主義関連の概念を翻訳した際に、これまでの造語方法に基づき、先行資料にある術語や、当訳本自製の術語を語基に数々の新たな術語が造られてきた。一方で、先行資料にある術語をベースに改造して造られたものもある。具体例として、「権力階級」の 1 語が取り上げられる。まず、堺・幸徳訳本 (1906) において、「権力階級」は以下の様に用いられていた。

此に於て、紳士閥が既に社会の権力階級たるに不適當なる事、及びそれが傍若無人にも之を法則として其存在を社会に強いるの不適當なる事、明瞭となれり¹⁸。

堺利彦・幸徳秋水訳「共産党宣言」(1906)

堺・幸徳訳本 (1906) において、「権力階級」は“Ruling class”の訳語として案出されたものであり、常に「ブルジョア」等の掠奪階級のことを指している。

本研究の調査によれば、日本語で“Ruling class”の訳語が誕生したのは 20 世紀の初頭であり、神戸正雄の『十九世紀に於ける社会主義及び社会的運動』(1903)において初期用例がみられた。

彼等民権党の目掛くる所の政府といひ権勢階級といふは、つまり資本家階級若くは資本家階級に一味するものに外ならずして…¹⁹

神戸正雄の『十九世紀に於ける社会主義及び社会的運動』(1903)

換言すれば、現今の勢力階級たる資本家雇主を代表し、其利益の為に使用せらるるの故を以て、彼等「プロレタリアート」が敵視せざるべからざる世界観に対するの敵対とふを意味するにあり²⁰ 神戸正雄の『十九世紀に於ける社会主義及び社会的運動』(1903)

神戸正雄 (1903) は 20 世紀の初頭に刊行された社会主義関連の著書であり、文中では“Ruling class”の概念を表すのに、「権勢階級」と「勢力階級」の二種類の術語が併用された。上記の二つの例文からみられる通り、「権勢階級」の方は「資本家階級」の同義語として用いられ、「勢

¹⁸ 堺利彦・幸徳秋水訳「共産党宣言」、『社会主義研究』第 1 号 (1906), p17。

¹⁹ 神戸正雄『十九世紀に於ける社会主義及び社会的運動』(1903), 日本経済社, p51。

²⁰ 神戸正雄『十九世紀に於ける社会主義及び社会的運動』(1903), 日本経済社, p163。

力階級」の方は「資本家雇主」の同義語として用いられ、両者ともマルクス主義学説における「ブルジョア」的なニュアンスがみられた。

しかし、後に刊行された堺・幸徳訳本(1906)では、神戸正雄(1903)の「権勢階級」、「勢力階級」の2語はいずれも伝承されず、「権力階級」という新しく案出された術語が“Ruling class”の訳語として充当されていた。

この様に、堺・幸徳訳本(1906)の「権力階級」は、神戸正雄(1903)の「権勢階級」、「勢力階級」をベースに改造して案出された術語である可能性が高いものとみられる。

3.2 句形式の短語からなる術語

堺・幸徳訳本(1906)に新しく現れた48語のうち、句形式の短語からなるものは14語ある。本研究の第2節で取り上げた先行資料にある術語では、句形式の術語の割合が僅か8%であるのに対し、堺・幸徳訳本(1906)に新しく現れた術語では、句形式の術語の割合は30%と比較的高めなのが特徴的であり、以下のものが挙げられる。

精神的生産、物質的生产、貨幣の経済、経済的要件、労働の器具、
労働階級の革命、累進率の所得税、民主的社会主义者、社会的自觉、
紳士の革命、生産の関係、生産の器具、危険なる階級、永久の真理

これらの14語は、主に「O+的+O」或いは「O+の+O」形式によって構成されているが、「危険なる階級」の様に「O+なる+O」形式で構成されたものもある。構成要素となる漢語部分には「紳士」、「交換」、「社会」、「生産」、「恐慌」、「労働階級」等のマルクス主義術語が挙げられる。

また、「交換の価格」、「商業上の恐慌」、「社会的生産」、「世界的市場」の4語に関しては、堺・幸徳訳本(1906)に先駆けて、それぞれ「交換価格」、「商業恐慌」、「社会生産」、「世界市場」という術語が先行資料において既に存在していたが、訳者は既存の複合語術語を使わず、句形式の短語の形で訳していた。

具体例として、「交換の価格」の1語を取り上げる。まず、堺・幸徳訳本(1906)において、「交換の価格」は以下の様に用いられていた。

人物の価値に代ふるに交換の価格を以てし、無数永続の特許的自由に代ふるに、彼の單純無法の自由、即ち自由貿易を以てせり²¹。

堺利彦・幸徳秋水訳「共産党宣言」(1906)

堺・幸徳訳本(1906)で用いられている「交換の価格」は“Exchange value”の訳語として充

²¹ 堺利彦・幸徳秋水訳「共産党宣言」、『社会主義研究』第1号(1906), p9。

当されたものである。本研究の調査によれば、日本で“Exchange value”の訳語が案出され始めたのは19世紀90年代頃であり、田島錦治の『日本現時之社会問題』(1897)において初期用例がみられた。

蓋し是等の物は何人も自由に使用し得るを以てなり、之に反して如何なる貨物を先づ有用価格を有するに非らざれば、決して交換価格を生ずる能はず、何となれば何人も自己の効用なき物に向つて価格を與ふるの愚者なければなり²²。

田島錦治『日本現時之社会問題』(1897)

田島錦治(1897)は19世紀90年代頃に刊行された社会主義関連の代表的な資料であり、文中において、“Exchange value”は四字漢語「交換価格」と訳されていた。

また、同じ時期に刊行された福井準造の『近世社会主義』(1899)でも“Exchange value”の訳語が用いられており、田島錦治(1897)と同じく、「交換価格」の形で表記されていた。

即ち資本家が労働者を使役するや、之に給与するに彼等が依りて生活し得べき丈の交換価格を以てするに過ぎず、而して此等最低の生活を標準として之を生産物の全価格より扣除せし、剰余の全ては、収めて自家の有に帰す²³。 福井準造『近世社会主義』(1899)

この様に、田島錦治(1897)、福井準造(1899)等の先行資料において、“Exchange value”は四字漢語「交換価格」の形で訳されていたにも関わらず、堺・幸徳訳本(1906)では「交換の価格」という句形式の短語の形で訳されていた。

以上の用例から見て、同時期の日本語では、1語としての結合が全般的に不安定であることが伺えられる。

4. 結び

本研究では日本最初の『共産党宣言』全訳本である堺・幸徳訳本(1906)を研究資料に、日本早期の社会主義関連資料を視野に置きながら、マルクス主義術語の生成プロセスを考察した。日本では堺・幸徳訳本(1906)が刊行される以前から、社会主義・マルクス主義を対象とした研究が30年余りにわたって行われ、漢籍語の語義転用、新漢語の創造、句形式の短語による直訳等の方法を以て、数々の術語が創出されてきた。堺、幸徳訳本(1906)では、早期の先行資料から多大な影響を受けており、数多くの術語が受け継がれてきたほか、それらのをベースとした術語の改造や派生語の案出を通して、更なる多くの概念を翻訳してきた。

先行資料で創出された術語に関しては、「闘争、革命、労働、生産、運動、共産党、労働者、

²² 田島錦治『日本現時之社会問題』(1897), 東華堂, p241。

²³ 福井準造『近世社会主義』(1899), 有斐閣, pp165-166。

生産力、無政府、共産主義、労働階級、社会主義、階級闘争」等と、多くの術語が堺・幸徳訳本（1906）を経て、現代日本語版訳本である服部文男訳本（1998）にも受け継がれている。一方で、堺・幸徳訳本（1906）で案出された術語の多くは、時代の流れを経て淘汰され、他の新たな術語に置き換わり、現代日本語版訳本の服部文男訳本（1998）でなお使われているものとして「農奴制、財産関係、禁欲主義、階級対立、精神的生産、物質的生産」にとどまっている。

日本語の社会主義・マルクス主義術語の発展史において、明治後期は新規術語の創出と既有術語の消化が重なる時期であり、堺・幸徳訳本（1906）からみた術語の伝承及び案出はその歴史を忠実に反映しているものとみられる。

参考文献

- 宮島達夫「『共産党宣言』の訳語」、『言語の研究』むぎ書房（1979）
- 森岡健二『近代語の成立 明治期語彙編（1991年改訂版）』明治書院（1991）
- 石川禎浩著、陶柏康译<关于陈望道翻译的《共产党宣言》>，《上海党史研究》第2期（1995）
- 朱京伟<马克思主义文献的早期日译及其译词>《语义的文化变迁》武汉大学出版社（2007）
- 陳力衛著、笹野ゆり訳『『共産党宣言』の翻訳の問題—版本の変遷から見た訳語の先鋭化について』、『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第49号八朔社（2008）
- 玉岡敦「日本における『共産党宣言』の翻訳と訳語の変遷—1904年から1925年まで—」、『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第49号八朔社（2008）
- 大村泉「幸徳秋水・堺利彦訳『共産党宣言』の成立、伝承と中国語訳への影響」、『大原社会問題研究所雑誌』第603号法政大学大原社会問題研究所（2009）
- 玉岡敦「日本語版『共産党宣言』における翻訳術語の変遷」、『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第53号八朔社（2012）

辞書類

- 豊田四郎編『マルクス経済学辞典』（1956）青木書店
- 宮川実編『マルクス経済学辞典』（1965）青木書店
- 久留間鮫造編『資本論辞典』（1966）青木書店

本論文為 2020 年度教育部人文社会科学研究青年基金项目“《共产党宣言》在中日两国早期译介过程中马克思主义術語的訳出、共享与演变研究”（項目批准号：20YJC740035）；中央高校基本科研業務費資助（Supported by “the Fundamental Research Funds for the Central Universities”）“近代中日《共产党宣言》伝播史視闕下马克思主义術語的生成、互動与演变研究”（項目批准号：DUT19RC(3)024）的階段性研究成果。項目主持人：劉孟洋